



エクソルスターズ
穢れた十字架

+

雨乃アリア

THE EXORCISTERS

DIRTY CROSS

BY

ARIA AMENO

心地よい風が、ふたりの黒い修道服をはためかせ、過ぎ去っていく。少女たちは示し合わせたように同時に帽子を押さえ、乱れた髪を指先で梳いた。

メアリーは、頭のうしろでふたつに分けた長い金髪をかき上げて、双子の妹に笑いかける。

「これなら、すぐにペンキも乾きそうね」

「——ごめんね、メアリー」

白い顔をちよつとだけ伏せ、レイチェルはつぶやいた。

「わたし、ちつとも役に立てなくて」

「そんなことない。レイチェルが役に立たないなんて、わたし、そんなふう
に思ったことなんかないわ」

「……ありがとう」

レイチェルは肩まで伸びた髪を揺らして、どこか寂しげに微笑んだ。

ナチュラル・ブロンドの髪に青い大きな瞳、白い肌と華奢な肢体——ほと
んど違うところはないのに、どうして妹だけが病弱なのかと、やりきれなく
なる。彼女は「おかげでみんな優しくしてくれる」と笑うが、それも姉への

気遣いなのだろう。

遊びざかりの幼少時代、いっさいの運動から遠ざけられ、友だちが山を駆けまわっているのを眺めながら、彼女はひとり膝を抱いてなにを思っていたのか。きっと自分などにはわからないさまざまな葛藤があって、いまの穂和なレイチェルがいるのだろう。

「それにほら、どうせ力仕事は、男のひとたちがやってくれたんだし。わたしだってなにもしてないよ」

それは事実だ。村の片隅にぽつんと建つブラッティー教会の荒廃ぶりはひどいもので、粉々に砕けたステンドグラスが散乱し、吹きさらしになった床

には砂埃やごみが山となって、聖壇やオルガンも使いものにならなくなっていた。とても少女ふたりと若い神父の三人だけで片づけられるようなものはなかったのだ。メアリーも簡単な掃除をしたくらいで、壁や窓の修復やペンキ塗りなどの厄介な仕事は、すべて村の若者たちがこなしてくれた。

そのおかげで、長いあいだ風雨にさらされ、もはや廃墟同然だった小さな教会は、しだいに往時の厳かな面影を取り戻しはじめている。

捨て子だった姉妹を拾い、愛情を注いで育ててくれた義父がこの世を去って、ちょうど十年。そんな節目の年に、ふたたび孤児となった当時のふたりを引き取って育ててくれた彼の親戚がこの世を去ってしまったのだから、な

んとも厭な偶然だ。

しかし、どうにか自分たちの力だけで生きていけるくらいに成長したふたりは、亡き父との思い出の村に戻ってくる事ができた。義父が神父をしていたその田舎の教会を立て直すことになったのは、レイチェルの提案がきっかけである。すぐにメアリーもそれに乗って、まずは荒れた聖堂を片づけることから取りかかった。

ふたりの義父であるウィリアム神父は、名の通った悪魔祓い師、いわゆるエクソシストでもあった。悪魔に憑かれた多くのひとを救った彼は、しかし悪魔からの深い憎悪をも一身に負ってしまう。彼を憎む悪魔たちとのたび重

なる戦いで、義父の体力はしだいに衰えていき、十年まえ、野蛮な悪魔を封じ込めるとともに、ついにみずからも永遠の眠りについた。

当時まだ幼かった双子は、深い哀しみに暮れた。だが、メアリーの内で、義父の死への哀しみは、いつしか悪魔への怨みへとかたちを変えていく。彼女はいま妹とともに、ウィリアムの古くからの友人であり、著名なエクソシストでもあるクロウ神父のもとを、みずからも立派なエクソシストになるため、週に三度ほど訪れている。

シスターになるための教育を双子に施してくれたのも、クロウ神父だ。さらに彼は、見習い神父だという若いニコラスを紹介してくれた。童顔でいか

にも頼りない彼は、いまではいちおう、ブラッティー教会の神父だ。

ふたりは歩き出した。もうすっかり陽が傾いて、土が剥き出しになったでこぼこ道は、黄昏に赤く染まっている。

「でも、家の片づけはふたりでやるしかなさそうね」

遠くに見えはじめた古い家を眺めながら、レイチエルは息をついた。自分より倍近くも大きな妹の胸が弾むのを盗み見て、メアリーは視線を伏せる。

「そこまで手伝ってもらうのは凶々しすぎるもんね。それに、あんまり引つかきまわされたくないし」

教会から歩いて三十分ほどの、村よりもさらに寂れたひと気のない山のふ

もとに、ふたりの家はある。義父が若いころに暮らしていたという古い屋敷で、こちらも教会ほどではないものの、なかなかの荒れ具合だった。この村に引っ越してきたのはもうひと月もまえになるが、教会のことでごたごたしていて、家のほうは少しずつ荷物を整理し、ようやく客人を迎え入れられるくらいに片づいてきたところだ。

家のドアをまえにして、メアリーはふと違和感を覚えた。妹も同じ思いらしく、青い大きな瞳が不安そうに揺れている。

「ねえ、なんか——」

レイチェルは姉の袖を掴んだ。

小さく頷いて、彼女はくすんだ木の扉に手をかける。真っ暗な家のなかを覗き込み、電燈のスイッチを入れると、姉妹は短く悲鳴を上げた。

「ひどい……」

青ざめた顔で、妹は双子の姉にしがみつく。

「大丈夫」

メアリーは怯える彼女の細い肩を抱き寄せて、室内を見まわした。

壁には無数の穴が空き、家具は壊されて散らばり、窓も派手に割られてい
る。ここへ引っ越してきたときよりも、さらにひどい状態だ。

粉々に砕けて散乱した皿やコップをよけながら、姉妹は家の奥へと進んで

いく。針金みたいに曲げられた水道管などを見ると、怪物でも入ってきて暴れたのではないかと、冗談ではなく思えてくる。

「お父さんの部屋も荒らされてるのかな……」

妹とまったく同じことを、メアリーも考えていた。お父さんの部屋というのは、ウィリアム神父の遺品や写真など、彼にまつわるものが置かれている部屋のことだ。

その部屋もやはり、ほかと同様の惨状を呈していた。

「ねえ！」

突然レイチェルが大声を上げるので、メアリーは驚いて振り返る。小さな

唇を顫ふるわせて、妹は床を指差した。

「なんてことを——」

メアリーは絶句し、青ざめた顔で十字を切る。

机や椅子が破壊されて散らばった床に、無残に砕かれた主の像があった。

そしてそのかけらのなか、一葉の写真が丸めて捨てられてある。

腰をかがめて、メアリーはそれを手に取った。

「お父さんの写真……」

折れ曲がってしわくちゃになった写真のなかで、義父が哀しげに笑っている。

ふいに風が吹いた。

そう思うと、なにか黒いものがふたりに飛びかかってくる。メアリーは驚いて身をかわしたが、妹はその影に突き飛ばされ、床に倒れてしまった。修道服の裾がめくれ上がって、白いタイツに包まれた長い脚があらわになる。

「ニコラス！」

メアリーは叫んだ。突然の侵入者は、ブラッテイー教会の若き神父だった。

「いったいなに？　これはニコラスがやったの？」

掴みかからんばかりの勢いで、少女は男に迫った。

彼はなにも答えず、口のはしから涎をしたたらせて、荒い息をついている。

ようすがおかしい。

思わずたじろいで、メアリーは身を引いた。男を睨みながら、レイチェルを抱き起こす。

ニコラスは、真っ赤に血走り、夜行動物のように光る瞳でこちらをじっと見据え、紫に変色した舌で唇を舐めている。彼が右手をゆっくりと挙げたとき、一陣の風が姉妹の金髪を乱した。ふたりの視界を、なにか白いものが覆い隠す。

メアリーの手に、硬いものがぶつかった。彼女は、それがカーテンレールで、自分たちにかぶせられた見憶えのある花柄の布はカーテンだと気づく。

あわてて白い布を振り払った双子のまえから、ニコラスは忽然と消えていた。メアリーは腰を低くして、さっと周囲に視線を走らせる。

「お姉ちゃん、うしろ！」

妹の悲鳴に振り向いたときには、それはすでに目のまえにあった。とっさに顔を横に向けたが、小さな家具のかけらをよけきることはできず、尖った木の破片が少女の白い頬を切って、緋色の血がうっすら滲んだ。

感情的になってしまいたいようになるのをこらえて、少女は男を睨みつける。気を鎮めるために、十字架をぎゅっと握りしめる。すると、ニコラスの顔から気味の悪い笑みが消えた。躰が硬直し、視線がせわしなく動きはじめた。

「ねえ、まさか——」

レイチエルが斜めうしろから囁いた。

「ええ……そうみたい」

まえを向いたまま頷いて、メアリーは手を伸ばし、首にかかった銀の十字をかける。

「ニコラスには悪魔が憑いてる。いまから悪魔祓いを行うわ」

若きエクソシストは決然と宣言した。

「ばかな」

平静を装っているふうだったが、隠しきれない動揺の色が、男の全身に広

がっていく。

「われらの父よ——」

メアリーは神父にゆっくりと歩み寄りながら、声を張り上げて聖句を唱えはじめた。妹もそれに続く。

「全能の神よ……」

「くだらんことを！」

吐き捨てて、彼は真っ赤な目で双子を睨めつけた。

ふいに家が揺れ出した。天井から埃が舞い、床が軋んで悲鳴を上げる。続いて突風が吹き抜け、姉妹の修道服をめくり上げた。長い裾が胸のあたりま

で持ち上がって、視界を黒く覆ってしまふ。

「主よ、このしもべを救いたまえ」

メアリーは空いたほうの手で服を顔から剥がし、祈祷を続ける。彼女は十字架をかざしたまま、ニコラスに気づかれないように妹に目配せした。レイチェルは視線だけで頷いて、そつとかたわらの壊れたチェストに手を伸ばす。そこに、緊急の場合に備えて聖なる水がしまつてあるのだ。

「主よ、われらの祈りを聞きたまえ……」

シスターは高らかに祈りのことばを投げ、悪魔にじりじりと近づいていく。ふたたび激しい振動が古い家を揺さぶり、ふたりはよろめいた。悪魔が耳

慣れぬ言語で狂った叫びを上げると、机の抽斗ひきだしが飛び出し、レイチェルに襲いかかってきた。身をかがめて彼女がそれをかわすと、木の箱は意思を持っているかのようにみずから方向を変えて、今度はメアリーに向かってくる。とっさに足許から拾い上げたカーテンレールを顔のまえにかざす。そこへ抽斗が直撃し、金属の棒が大きく歪んで、重い衝撃が腕を痺れさせた。レールの尖った折れ目が少女の瞳を突き刺さんばかりに鋭く迫り、彼女はそれごとく、意思を持った箱を悪魔めがけて思いきり押し飛ばす。抽斗はニコラスの脇をかすめて壁にぶつかり、中身をぶちまけながら床に落ちた。

悪魔が一瞬だけ怯んだ隙をついて、メアリーは男に飛びかかり、かぶって

いた帽子で彼の顔を覆って視界を奪う。すかさずそこへレイチェルが駆け寄り、姉がニコラスの顔から帽子を剥ぎ取るのと同時に、彼の顔面に聖水を浴びせかけた。

「やめろっ、このくそシスター！」

わずかに残っていた窓硝子が一瞬で砕け散り、吹き飛んだ。地を揺るがすほどの大音声を上げ、悪魔はのたうちまわる。双子の妹は鋭い眼差しで男を見据え、水滴を落とし続けた。

「やめろと言っているんだ！」

顔を真っ青にして叫ぶと、ニコラスは手を伸ばしてレイチェルの細い足首

を掴んだ。

「あっ！」

力強く引っ張られて、彼女は体勢を崩し、うしろへ転倒した。

思わず気を取られたメアリーの脚を掴んで、神父は身を起こす。少女は床に強く背中を打ちつけられた。

脚を高く持ち上げられてほとんど逆さ吊りになった双子の姉の、白い下着に包まれた無垢な秘部へと、ニコラスが汚れた靴底をぐりぐりと押しつける。

「なにするのよ！」

甲高い悲鳴を上げ、彼女は長い脚で神父の肩を蹴り上げた。男は一歩しり

ぞく。

脚から悪魔の手が離れると、少女の秘部を蹂躪していた彼の脚を、今度はメアリーが掴んだ。それを力いっぱい引っ張ってやると、ニコラスはバランスを失い、無様に倒れ込む。

「レイチェル！」

そう呼んだときには、すでに妹は瓶を手に、倒れた悪魔の脇に立っていた。

メアリーもすぐに立ち上がり、ニコラスの横にかがみ込んで、聖句を唱えはじめる。

「穢れたる霊よ、よこしまなる力とともに、地獄の亡者とともに、凶悪なる

仲間とともに――」

姉が十字架を悪魔の眼前に突きつけ、双子のシスターは同時に叫んだ。

「退散せよ！」

レイチェルが、それと同時に男の顔へ聖水を垂らし、続ける。

「これは主の命令よ。風と海を鎮めし父なる神の！」

「牝豚どもめが！　こんな……やめろおおおっ！」

全身からおぞましい臭気を発し、ニコラスは身悶えした。

メアリーが男に覆いかぶさって押さえつけ、彼の顔にレイチェルが聖水を浴びせ続ける。奇怪な雄叫びを上げながら苦しんでいた悪魔は、やがて力を

失っていき、ついに動かなくなつた。

「……勝つたの？」

穏やかな神父の顔をこわごわと覗き込んで、妹がつぶやく。

「そうみたい。——ねえ、ニコラス、大丈夫？」

汗まみれの掌で、メアリーは男の頬を叩いた。彼はかすかに瞼を顫わせて、

「うう」とうめきを洩らす。

「平気みたいね」

少女は床に尻をつき、無造作に脚を投げ出して、深いため息を落とした。

汗でべっとりした肌に衣服が張りついて、気色が悪い。

「着替えなくちゃ……」

つぶやきながら、レイチエルが立ち上がる。そして彼女は、平然とその場で服を脱ぎはじめた。袖から腕が抜かれ、修道服が乾いた音をたてて足許に落ちる。

「ちよつと、ニコラスがいるのよ？ 着替えるんならむこうで——」

控えめな妹の、突然の大胆な行動に焦って、メアリーは声を裏返らせる。

「だって暑いんだもん」

彼女はこともなげに言うと、ブラジャーのホックを外した。純白の下着が舞って、ふくよかな乳房があらわになる。そしてショーツに手をかけると、

少しのためらいもなくそれを脱ぎ捨ててしまった。

「レイチェル……」

メアリーはゆっくり立ち上がる。

「あなた——違うわ。レイチェルじゃない」

「なんのこと？」

「とぼけないで」

十字架を握りしめて、シスターは妹に歩み寄った。

「まだいたのね？ 早くレイチェルから離れなさい」

語気も荒く彼女が言うと、レイチェルは幼い顔に似つかわしくもない妖艶な

笑みを浮かべて自分の胸へと手を持っていった。小さな掌が白いふくらみを荒々しく掴むと、玉のように丸く大ぶりの胸が、指のあいだからひしゃげて顔を出す。

「やめなさいっ！」

掴みかかったメアリーは、次の瞬間には壁に叩きつけられていた。背骨に痺れが走って、躰が動かない。

憑かれたシスターは指先で乳首をつまみ上げ、くりくりと転がした。そうすると、見る見るうちに可憐な桃色の突起が充血し、尖った果実が硬くふくらんでくる。

「ん……ふっ……すっかり女の躰ね。清楚な顔して——あうっ、ず、ずいぶん感度がいいじゃない。きつとこいつ、陰じゃ淫乱な牝豚よ」

小さな乳輪から飛び出した乳首をこねくりまわし、腰を揺らめかせながら、レイチエルは息も絶え絶えに言う。細い指が勃起した乳首を弾くと、張りつめた双丘がわずかに顫えた。

「メアリーだって、隠れてオナニーくらいしてるんでしょ？　こうやっておま×こをいじって」

少女は、立てた中指でみずからの恥裂をなぞった。

「妹に触らないで！」

背中を押さえながら立ち上がって、メアリーは怒声を飛ばす。

「こんな若いうちから淫乱だなんて……んっ……お父さんが浮かばれないわね。せっかく大事に育ててくれたっていうのに……」

薄い恥毛の下の亀裂を押し拡げて、彼女は嗤^{わら}う。

「お父さんのこと知ってるの？」

メアリーは驚いて顔を上げた。まさか——と、思考を巡らせる。

「あんたの考えてるとおりよ」

シスターの考えを読み取ったように、妹が言った。

——やっぱりそうなんだ。こいつは……。

続きは製品版でお楽しみください。